

科目名 Course Name		開講年次	開講学期	曜日・時限
発達心理学Ⅱ Developmental Psychology II		2年	後期	別途、時間割参照
単位数	授業の形態	授業の性格		履修上の制限
1単位	演習	選択	(保育士養成課程必修)	こどもフィールド対象だが、進学希望者は応相談
当該科目の理解を促すために受講しておくことが望まれる科目				
発達心理学Ⅰ、幼児心理学				
同時に履修しておくことが望まれる科目				
保育士養成課程科目				
担当者に関する情報				
氏名	研究室の場所	オフィスアワー		電話番号・メールアドレス
秋山真奈美	講義棟3階	火・土・授業時間を除く		授業中に指示します
授業の概要				
「発達心理学Ⅰ」・「幼児心理学」で学んだ乳幼児の発達についての知識を基に、より具体的で応用的な、発達を引き出すための関わり方について学ぶ。本教科は演習であり、経験から得た知識を学友に紹介する機会を設けるので、これらの知見を共有し、演繹的に活用できるようになることを期待したい。				
授業の目標				
①実習等での経験を帰納（一般化・原理化）し、言語化できるようにする。 ②経験から得た知識を学友と共有し、演繹的（応用的）に活用できるようにする。 ③生涯発達の概念や保育現場の現状を意識し、他者の意見を聞きながら、自分なりの考えを構築できるようにする。 ④児童期以降の発達の様相を知り、それに向かった保育・発達支援が想起・想定できるようになる。 ⑤発達障害を持つ対象に対し、心理学的知見を用いて学習・生活支援の勘所が押さえられるようになる。				
授業の方法				
講義の他、ディスカッションやグループワークを含む。第13～14回の授業内で考查課題としてレポート発表（グループ発表可）を募り、口頭ではなく論述でのレポートを望む者には第14回目での提出を求める。				
学習の成果（学習成果）				
(1)発達に関する知識を現実場面で活用できるよう、学んだことと身近な事象とを結び付けることができる。 (2)生涯発達の視点を有し、対象の状態に応じた支援についての心構えを持つことができる。 (3)保育の専門家としての知見に、心理学的知識を根拠として挿入できる。				
授業のスケジュールと内容				
第1回目	オリエンテーション：授業の方法と計画の説明 発達と子どもを取り巻く環境			
第2回目	生涯に亘る発達の道筋：幼児期から児童期へ 小1プロブレムと就学支援			
第3回目	生涯に亘る発達の道筋：児童期の発達 社会性の拡大			
第4回目	生涯に亘る発達の道筋：思春期の発達 童話に見る思春期心性 思春期の危機 青年期の発達 自立性の発達			
第5回目	生涯に亘る発達の道筋：成人期の発達 子育ては母親だけの仕事？（※ディスカッション→発表） 世界の子育て 親としての成長			
第6回目	生涯に亘る発達の道筋：成人期の発達 壮年期・老年期の発達 次世代の育成 人生の重なりと循環（ライフサイクル） 生涯学習について			

第7回目	中間試験：児童期～老年期の発達 保育における発達援助 個人差や発達過程に応じた保育：知能と評価 精神遅滞児・オーバーアチーバー児への対応 適正相互作用	
第8回目	保育における発達援助 発達障害への対応：自閉症スペクトラム児への支援	
第9回目	保育における発達援助 発達障害への対応：学習障害児・注意欠陥多動性障害児への援助	
第10回目	子どもの生活と学び：子ども相互の関わりと関係づけ 子ども集団と保育の環境	
第11回目	子どもの生活と学び：子どもの主体性を育む発達援助の実際 子どもの自己主張と自己統制への関わり	
第12回目	発達の課題：個人差や発達過程に応じた援助とは？ 現代社会における子どもの発達と保育の課題	
第13回目	研究発表：保育・発達に関する研究報告（※口頭発表：グループ発表可）	
第14回目	研究発表：保育・発達に関する研究報告（※口頭発表：グループ発表可） レポート提出	
第15回目	環境としての保育者の発達：保育者の熟達化 発達援助における協働	
事前・事後学習	研究発表に向け、シラバスを参照しながら平行して調査研究を持続すること。予習に基づいた授業中の質問は授業態度において加点する。	
成績評価の方法と基準		
評価の領域	割合	評価の基準
授業参加態度	10%	他者の話に真剣に耳を傾け、また、積極的にディスカッション・グループワークに参加し、講義や発表への疑問については臆さず質問すること。
レポート	40%	口頭レポート（第13～14回発表）あるいは論文レポート（第14回提出）のいずれかの形式でプレゼンテーションしてもらおう。いずれも満点要件はオリジナリティと論理構成、保育者としての視点の有無である。
調査報告書		
小テスト		
試験	40%	中間考査（児童期以降の発達について）を実施する。多問型と論述型を組み合わせた試験なので、講義をよく聴き、まんべんなく勉強しておくこと。
発表内容（態度含む）	10%	グループディスカッションの結果発表をしてもらう際、発表内容（および構成）はもちろん、プレゼンテーションの巧緻も評価する。聴講者を惹きつける相互作用的なプレゼンテーションが理想的である。
その他		
教科書と参考図書		
教科書：「保育の心理学Ⅰ・Ⅱ」本郷一夫〔編〕（建帛社）および『新版 保育のための教育心理学』坂原明〔編〕（おうふう）。両方とも発達心理学Ⅰ・教育心理学で購入しているので新規購入はしなくてよい。参考書・資料は初回授業はじめ各回授業で随時紹介する。		
履修上の留意点・ルール		
本教科は演習科目であるので、講義科目以上に主体的に参加することを期待する。私語・居眠り・授業に無関係の行動・不参加は「授業参加態度」において減点の対象とする。 原則としてこどもフィールド用開講科目であるが、他フィールドでも事情次第で受講を認め得るので、担当者に相談されたい。		